

文学的な文章を読もう（読むこと④）  
詩の表現を説明したり、考えたりしたことを交流しよう

年

組

番

氏名

◇ 北川さんの学級では、金子みすゞの「ふしぎ」を読んで考えたことをグループで交流することにしました。

【詩一】

ふしぎ

わたしはふしぎでたまらない、  
黒い雲からふる雨が、  
銀にひかっていることが。

わたしはふしぎでたまらない、  
青いくわの葉食べている、  
かいこが白くなることが。

わたしはふしぎでたまらない、  
たれもいじらぬ夕顔が、  
ひとりではらりと開くのが。

わたしはふしぎでたまらない、  
たれにきいてもわらってて、  
あたりまえだ、ということが。



【詩二】

四月

新しいご本、  
新しいかばんに。

新しい葉っぱ、  
新しいえだに。

新しいお日さま、  
新しい空に。

新しい四月、  
うれしい四月。





## 【解答と解説】

### 問一

【あなたが見つけた特ちょう的な表現】

四つのまとまりの最後がすべて「ことが。」で終わっています。同じことばで終わっていることで、詩にリズムが出ていると思いました。

右の解答例は「ことが。」ということばで終わっている特ちょうについて書いたものです。この他に、この詩では「倒置法」を使って表現しているという特ちょうもあります。この特ちょうをとらえて書くときぎのような解答になります。

【あなたが見つけた特ちょう的な表現】

それぞれのまとまりの最後の一行は「ふしぎでたまらない」の主語になっています。

主語と述語の順番をかえることで（倒置法を使うことで）「ふしぎでたまらない」という思いが強調されています。

※解答では「段落」を「四つのまとまり」ということばで書きました。「段落」ということばを使って書いてもよいです。

### 問二

四つ目のまとまりの部分で詩の題名のことばを使って、一番伝えたいことが書かれていることが共通している。

右の解答例の他に、次のような解答も考えられます。

○【詩一】では「わたしはふしぎでたまらない」、【詩2】では「新しい」というように、同じことばをくり返して使っていることが共通している。

○「倒置法」で書かれていることが共通している。

○どちらも四つのまとまりで書かれている。

※文字数は問われていないので、解答の文章の長短は問いません。